第一章　夕霧の物語　小野山荘訪問

［第一段　一条御息所と落葉宮、小野山荘に移る］

まめ人の名をとりて(堅物との評判を取って)、*さかしがりたまふ大将(そのように自重していらっしゃる大将は)、この一条の宮の御ありさまを(この一条宮未亡人の生活ぶりを)、なほあらまほしと心にとどめて(依然として好ましく思って)、おほかたの人目には(世間体としては)、昔を忘れぬ用意に見せつつ(故大納言への旧交を忘れない礼を保ちつつ)、いとねむごろにとぶらひきこえたまふ(とても親切にお見舞い申しなさいます)。　*「さかしがる」の「がる」は形容詞・形容動詞の語幹や名詞に付いて、その意識性を示す接尾語、のように辞書類に説明がある。で、「さかしがる」は＜こざかしくふるまう＞と古語辞典にある。が、此処の文意が大将自身の意識性自体を示すものなら、「さかしがりしたまふ」という言い方になるのではないか。しかし、此処では「さかしがりたまふ」とあって、是は大将の意識性のある態度を客観的に示す言い方、であるように見える。で、「がる」の読み方だが、是は＜接尾語＞というよりは、形容詞で見れば連用形の、例えば「さかしく」に形状表示動詞の「あり」が付いた強調語の「さかしくあり」の連体形「さかしくある」の音便が「さかしがる」という言い方、なのだと取るべきもののように見える。「さかし」は＜優れて賢い＞や＜しっかりしている＞という形容詞とのことだが、語感としては＜如何にもそれらしい説得力があるさま＞という印象だ。だから、此処の文脈では「まめ人の名をとりて」に対して＜それらしく自重した態度でいる＞という意味なのだろう。注には、この「まめびと」という大将の一面を取り上げるを文意を＜『集成』は「やや揶揄的な筆致。真木柱の巻に、髭黒が「名に立てるまめ人」とされており、同じ巻に、夕霧も「この世に目馴れぬまめ人」とされていた」。『完訳』は「夕霧は「まめ人」と称されてきたが、ここでは自らそれを意識して落葉の宮接近を合理化する。「さかしが」るのも、そのため。実直な男が盲目的な恋に陥る点で、鬚黒大将とも類似。『宇津保物語』の源実忠や藤原仲頼も、妻子を捨てて貴宮への恋に溺れる」と注す。＞としてあるが、素人の私には難し過ぎる説明だ。武官を硬派、文官を軟派、とするステレオタイプの一般認識を逆手取った皮肉っぽい語り口、みたいなことだろうか。尤も、ステレオタイプ(銅板大量印刷)という語自体も私よりは一時代前の世代の言葉だ、が。

下の心には、かくては止むまじくなむ(内心ではこのままお人好しの世話焼きで済ませたくないという未亡人への執着が)、月日に添へて思ひまさりたまひける(日を追うごとに強くなっていらっしゃったのです)。

御息所も(宮の母君の御息所も)、「あはれにありがたき御心ばへにもあるかな」と(親身で有難い御親切であるものと)、今はいよいよもの寂しき御つれづれを(藤君の死から二年を過ぎて、今はいよいよ来訪者も減って物寂しい宮の所在無い日々に)、絶えず訪づれたまふに(絶えず訪れくださる大将に)、慰めたまふことども多かり(心を癒されなさることが多かったのです)。

初めより懸想びても聞こえたまはざりしに(初めから色絡みで御世話申したのではないので)、

「ひき返し懸想ばみなまめかむもまばゆし(急に色めいて口説くのも気恥ずかしい)。ただ深き心ざしを見えたてまつりて(今までどおり親切に御世話申して)、うちとけたまふ折もあらじやは(宮が気を許しなさらないでもない折を待てば良いだろう)」

と思ひつつ(と思いながら)、さるべきことにつけても(お見舞いに訪れる際にも)、*宮の御けはひありさまを見たまふ(大将は宮の後様子を窺いなさいます)。みづからなど聞こえたまふことはさらになし(しかし大将が几帳越しに宮に語りかけても、宮ご自身がお返事なさることは全くありません)。　*「宮の御けはひありさまを見たまふ」については、注に＜落葉の宮の雰囲気や様子を。「見たまふ」は、注意を払う、関心をもつ、意。几帳が間にあるので直接見ているのではない。＞とある。

「いかならむついでに(どういう時に)、思ふことをもまほに聞こえ知らせて(この恋心を直接お知らせ申して)、人の御けはひを見む(宮の御反応を知ることが出来るのだろうか)」

と思しわたるに(と大将が思い続けていらっしゃると)、御息所、もののけにいたう患ひたまひて(御息所がひどく熱にうなされなさって)、*小野といふわたりに(比叡山のふもとの小野という辺りに)、山里*持たまへるに渡りたまへり(お持ちの山荘に転地療養なさいました)。　*「をの」については、注に＜京都の北の郊外。修学院離宮のあたり。＞とある。下文にも「麓近くて」と、天台宗総本山比叡山延暦寺の麓であったことが記されているので、いっそ左様に補語明記して置く。　*「持たまへる」は「もちたまへる」の促音便で「もったまへる」と読むらしい。

早うより御祈りの師に(早めに平癒祈願の祈祷師として)、もののけなど祓ひ捨てける律師(邪気を祓い清める霊力のある修験師で)、山籠もりして里に出でじと誓ひたるを(山籠りして里には下りないと誓いを立てた者を)、麓近くて(麓近い小野に)、*請じ下ろしたまふゆゑなりけり(下りて来て貰いなさる為なのでした)。　*「請ず(さうず、しゃうず)」は＜請い招く、頼んで来てもらう＞と大辞泉にある。

御車よりはじめて(その移転のための御車を初めとして)、御前など(先駆けや衛士たちなど)、大将殿よりぞたてまつれたまへるを(大将殿がご用意して差し上げなさったが)、なかなか*昔の近きゆかりの君たちは(その大将の世話焼きの所為で宮を兄嫁とする関係性に於いての立場が、なかなか示し難い故大納言の弟君たちは)、ことわざしげきおのがじしの世のいとなみに*紛れつつ(多忙な彼ら自身の日々の公務を口実に)、えしも思ひ出できこえたまはず(敢えて其処まで気が付き申し上げなさいません)。　*「むかし」は故人、亡き夫の藤大納言を指す、らしい。注には「近きゆかりの君たち」を＜柏木の弟たちをいう。もって回った言い方。＞とある。「もって回った」というよりも、源君が熱心に宮の世話をしている事情に鑑みて、「なかなか」微妙な立場になっている弟君たち、ということなのだろう。　*「まぎる」は＜誤魔化す→口実にする＞。

弁の君、はた(弁官の藤氏次男の君はまた独自に)、思ふ心なきにしもあらで(宮への懸想が無きにしも非ずで)、*けしきばみけるに(婚意を示した所)、ことの外なる御もてなしなりけるには(宮は意中には無いという御拒絶反応だったので)、しひてえ*参でとぶらひたまはずなりにたり(進んではとても参上して御見舞申し上げなさらないようになっていたのです)。　*「けしきばむ」は＜意向を示す＞だが、この場合ははっきりと＜婚意を示す＞と読まないと、続く「ことの外なる御もてなし」が＜宮の拒絶反応＞という意味にならない。「ことのほか」は＜格別＞の語用ではなく＜存外＞の語用だが、それでも、「けしきばむ」が曖昧な態度だったと解すなら、それに対する「存外」も＜拒絶＞までは行かず、単に＜気乗りしない＞程度の印象で、その場での折り合いが付かなかっただけの失敗で済むことのような、また別の機会がありそうな言い方に見える。しかし、弁君は「とぶらひたまはずなりにたり」と勝負あったかの文意なので、「御もてなし」は＜宮の

拒絶＞であり、となればやはり、この「けしき」は＜結婚の意向＞と取るべきものに見える。強いて言えば、何も性急に婚意を示す必要が弁君側の事情にあったとも思えないので、余り早い段階で結論を急いだこと自体が弁君の失敗だった、という文意に思えなくも無い。それが下文の「いとかしこう、さりげなくて」という源君の遣り方の反面説明にもなっているような文脈、とは読める。ただ、しかし、此処まで読み手に推論を強要するとは、いかにも分かり難い婉曲話法だ。これで当時の読者はごく普通に読み進めたとするなら、「けしきばむ」や「ことのほか」を当時の女房たちは日常的にそういう具体意で語用していた、ということなのだろうが、言葉の原義と現代語での言い換えの関係に於いては、やはり曖昧表現の本文だ。　*「参で」は「まで」と読むらしい。「まで」は「まうづ（参出づ、詣づ）」の連用形「まうで」の音変化、ということらしい。

この君は（こちらの大将君は）、いと*かしこう（とても畏まった態度で）、さりげなくて聞こえ馴れたまひにためり（懸想を表に出さずに御世話申し上げて親しくご訪問なさっていらっしゃるのでした）。　*「かしこう」は「かしこし」の連用形「かしこく」のウ音便のようで、「かしこく」は＜賢く（利発に）＞ではなく＜畏く（慎んで、礼儀正しく、尊敬して）＞という意、なのだろう。

修法などせさせたまふと聞きて（修験者に平癒祈願をさせなさる御意向と聞いて）、僧の布施（僧への諸手当や）、*浄衣などやうの（僧衣などのような）、こまかなるものをさへたてまつれたまふ（細かな所まで気を配って大将は御息所の御療養のために用意申し上げなさいます）。　*「浄衣（じゃうえ）」は＜僧の着る白衣＞らしいが、これが本来の＜布施＞のような気もする。が、「布施」は実際には謝礼の諸手当だろう。

悩みたまふ人は（病人本人の御息所は）、え聞こえたまはず（大将への御礼文を書く事もお出来になれません）。

「なべての*宣旨書きは（女房が業務で書く代書の礼状では）、ものしと思しぬべく（不服にお思いなさるであろう）、ことことしき御さまなり（重役のご身分の大将殿です）」　*「宣旨」は天皇の命を伝える公文書。それは文書官によって代筆される。で、「宣旨書き」は＜代書のこと＞とのこと。「なべて」は文書官や女房などが＜業務としてすること＞。

と、人びと聞こゆれば（と女房たちが申し上げたので）、宮ぞ御返り聞こえたまふ（宮が御礼状をお書きなさいます）。

いとをかしげにて（とても才知ある風情の字体で）、*ただ一行りなど（礼辞本文の和歌一行だけを書いてあるという）、おほどかなる書きざま（世辞のない大様な書き方で）、言葉もなつかしきところ*書き添へたまへるを（歌の文句も古歌を踏まえて本歌取りしていらっしゃったのを）、いよいよ*見まほしう目とまりて（大将は宮の教養の高さと感心して、いよいよ欲情に駆られるものと目に止まって）、しげう聞こえ通ひたまふ（繁く手紙を交わしなさいます）。　*「ただひとくだりなど」は注に＜『完訳』は「和歌を一行書きにしたものか」と注す。＞とある。分かり難いが、限定条件を示す副詞「ただ」は＜それだけ、それ以外に無い＞という意味で「おほどかなる書きざま」を説明しているように見える。だから、宮の礼状は前後の辞を省いた一行文だった、と考えて見る。と、一行文で心を表わせる文型は和歌なのだろうと推論できる。が、それなら何故、作者は歌本文を掲載しないのか。宮の人物像が浮かび上がるのを避けた、のだろうか。事の運びに説得力が増し過ぎるのを嫌ったのだろうか。都合の好い句が浮かばなかったのだろうか。それ

らを知る術は無いが、逆説的に歌は人の‘生’を表わす、と改めて思い知る。　*「書き添ふ」は普通＜書き加える＞ということらしいが、此処では宮の手紙は一行の和歌文だったのだから、また、その上で「言葉もなつかしきところ(その歌の文句も有名な古歌に因んで)」ということなので、この「そふ」は＜副う・沿う(準える、見習う)＞という意なのだろう。　*「見まほし」はざっと＜会いたい＞だが、此処での「見る」は＜情交＞だ。大将は宮の器量には過度の期待は抱いていないようだが、その王家の宮びには大いに憧れているらしい。其処に自己存在の冥利の滴を垂らし込めるかと思えば非常に興奮する、という価値観なのだろう。この源君の精神構造は藤君の女三の宮への憧れと類似する。どちらも身近な王家の存在には高を知ってか無頓着だが、手の届きそうで届かない距離感には執着する、みたいな話で、ミイラ取りがミイラ、みたいな趣はある。王家の魔力か。王家にミイラが付き物なのはエジプトだけの話じゃなかった、とは我ながらクダラナイ。

「なほ(今尚更に、このように頻繁な文通があるようでは)、つひに*あるやうあるべきやう御仲らひなめり(いつかは結ばれそうな御関係に違いない)」　*「あるやうあるべきやう」は注に＜大島本の「あるやうあるべきやう」という「やう」の重複はいかにもくどい拙文の感じ。＞とある。写本画像サイトを見ると、国立博物館蔵の保坂本(6/107)も京都大学蔵の写本(v.37,p.009)も「あるやうあるべき御」とあり、単純な誤写に過ぎないのかも知れない。

と、北の方けしきとりたまへれば(と奥方が様子を察しなさるので)、わづらはしくて(その機嫌を損ねるのが煩わしくて)、参うでまほしう思せど(大将は宮が御息所に付き添っていらっしゃる小野の山荘に参上したくお思いだったが)、とみにえ出で立ちたまはず(急にはお出掛けなさいません)。

[第二段　八月二十日頃、夕霧、小野山荘を訪問]

*八月中の十日ばかりなれば、野辺のけしきもをかしきころなるに、山里のありさまのいとゆかしければ(八月二十日ほどになって野辺の景色も秋の風情が増して山里の様子がとても偲ばれたので)、　*「はちぐゎちなかのとをかばかり」は注に＜八月二十日ころ、中秋をや過ぎたころ。＞とある。

「*なにがし律師のめづらしう下りたなるに(例の高名な修験道士が珍しく下山したようで)、せちに語らふべきことあり(是非会って話を聞いてみたいのです)。御息所の患ひたまふなるもとぶらひがてら、参うでむ(御息所の御病気のお見舞いがてらに小野に出かけます)」　*「なにがし」は注に＜以下「とぶらひがてら参でむ」まで、夕霧の詞。「某律師」は雲居雁の前では実名で言ったのを、語り手が読者には「某」とぼかして表現したもの。『完訳』は「語り手が固有名詞をぼかした」と注す。＞とある。

と、*おほかたにぞ聞こえて出でたまふ(と夫人には表向きの理由をつけて大将は小野山荘に向かいなさいます)。　*「おほかた」は＜ひととおり、表向き＞。「にぞ」の故意強調で「聞こゆ(申し上げる)」のは＜弁明する、申し開きをする＞という釈明の言い方。

*御前、ことことしからで、親しき限り五、六人ばかり、狩衣にてさぶらふ(大将の牛車に先行する騎馬武者も簡素にして親しい者の五、六人だけが狩衣装束で従います)。　*「御前」は「ごぜん」と読みがあり＜先行者＞のことらしい。貴人の目の前という意味で、その御側を言う「おまえ」とは違って、「ごぜん」は「先駆・前駆(せんぐ、ぜんぐ、ぜんぐ)」なる＜行列などの前方を騎馬で進み、先導すること。また、その人。さきのり。さきばらい。先駆。＞(大辞泉)という役割の語に尊称の「御」が付いた言い方、ということのようだ。近衛

大将の正式の外出には舎人随身が武官装束で八人従う決まりだった、と古語辞典にあるので、狩衣の五、六人は私的な軽装なのだろう。

ことに深き道ならねど(小野の山荘へは特に深い山道ではないが)、*松が崎の小山の色なども(高野川沿いの対岸に松が生えた山の風情なども)、*さる巌ならねど(然程には険しい岩壁ではないが)、秋のけしきつきて(秋の気配が色付いて)、*都に二なくと尽くしたる家居には(都内で意匠を凝らしてある諸庭園などよりは)、なほ(なお一層)、あはれも興もまさりてぞ見ゆるや(深みも変化も優れて見えるものなのです)。　*「まつがさきのをやま」については、注に＜『集成』は「尾山」と宛て、「歌枕。修学院の対岸、高野川の右岸に張り出した形の山。所々に岩盤が露出し、松の木が多い。「尾山」の「尾」は、峯の意」と注す。＞とある。従う。　*「さるいはほ」は＜如何にも険しい岩壁＞。　*「みやこに二なくとつくしたるいへゐ」は注に＜『完訳』は「六条院の秋の町と対比して、小野の秋の美しさを称揚」と注す。連語「には」比較を表す。＞とある。が、この目線は大将源君であり、「尽くしたる」と敬語遣いも無いことからも、源氏父殿の六条院だけというよりは、六条院を初めとした都内の立派な貴族の諸庭園、くらいの語感に思える。むしろ作者は「家居」という語に＜人家→造り物の景観＞という一般的な批判を込めている、ように見える。そういう語調で「なほ(更に一段と)」「見ゆるや(見えることです)」という誇張表現に説得力を与えようと企画されている、のだろう。

はかなき小柴垣もゆゑあるさまにしなして(御息所の小野山荘はちょっとした小柴垣も風流な様に作ってあって)、かりそめなれどあてはかに住まひなしたまへり(仮のお住まいだが品よくお暮らしになっていらっしゃいました)。

寝殿とおぼしき*東の放出に(寝殿造りなら正殿に当たると思われる山荘本屋の東側板の間を正面に見立てて)、*修法の檀塗りて(祭壇を設けて)、北の廂におはすれば(北側の板の間に御息所が静養していらっしゃるので)、西面に宮はおはします(西側の板の間に未亡人の宮は住んでいらっしゃいます)。　*「ひんがしのはなちいで」は＜東側を母屋に見立てた場所＞なのだろう。其処が「寝殿とおぼしき」なのか、「ひんがし」を含む建物全体が「寝殿とおぼしき」なのか、前者のような気もするが、後者と見て言い換えて置く。実態は良く分からないが、何れにせよ、この山荘には母屋に相当する設営の部屋は無い、と思って置く。板の間空間を御簾や几帳や衝立で仕切った生活で、襖仕切りのしっかりした部屋割りは無い、のだろう。　*「すほふのだん」は＜加持祈祷を行う祭壇＝護摩壇＞で、加持は印を切って呪文を唱え芥子を焼く、みたいな作法の画像を見たことがあるので、火を受ける陶器か金桶が必要なはずで、「塗る(ぬる)」はその火桶の周りを土で囲うのだろうか。まぁ、よく分からないので曖昧に言って置く。

御もののけむつかしとて(物の怪の災いがお危ぶまれるということで)、とどめたてまつりたまひけれど(御息所は宮の小野山荘への御同行をお止め申しなさったが)、いかでか離れたてまつらむと(宮は母御息所にどうして離れ申し上げなさっていらっしゃれようかと)、慕ひわたりたまへるを(慕ってお移りなさったのを)、人に移り散るを懼ぢて(御息所は物の怪の障りが宮に及ぶのを恐れて)、すこしの隔てばかりに(少しでも遠ざけようと)、あなたには渡したてまつりたまはず(病室にはお入れ申しなさいません)。

客人のゐたまふべき所のなければ(客人をお通しする部屋が無いので)、宮の御方の*御簾の前に入れたてまつりて(宮の御部屋の前の御簾で仕切られた板の間に大将をお入れ申し上げて)、上臈だつ人びと(御息所の側近女房たちが)、御消息聞こえ伝ふ(伝言を取り次ぎ申します)。　*「御

簾の前」は縁側になりそうだが、「入れたてまつりて」とあるので室内ではありそうで、山荘の西側とされる宮の部屋の更に西側か南側の廂に大将を案内した、ということのようだ。であれば、山荘の大きさは良く分からないが、御息所の病室とは相当に離れているだろうし、その伝言に立ち働く女房の気配を宮も感じ取る、という設定なのだろう。話の展開を予感させる配置かと思うが、私には具体事象が掴み難い。

「いとかたじけなく(まことに有難く)、かうまでのたまはせ渡らせたまへるをなむ(このようにまで厚い御手配のご心配頂き、本日はまた直々に御見舞頂きましたからは)、もしかひなくなり果てはべりなば(もしその御厚情に背いて敢え無く果ててしまいましたならば)、このかしこまりをだに聞こえさせでやと(この御礼さえ申し上げられないではないかと)、思ひたまふるをなむ(存じまして)、今しばしかけとどめまほしき心つきはべりぬる(今しばらく生き延びたいという気になっております)」

と(と御息所は)、聞こえ出だしたまへり(ご挨拶申し上げなさいます)。

「渡らせたまひし御送りにもと思うたまへしを(お引越なさる時にも付き添い申そうと存じましたが)、*六条院に承りさしたることはべりしほどにてなむ(六条院の御用が中途になっておりましたので、失礼致しました)。　*「六条院に承りさしたること」は注に<『完訳』は「口実である。雲居雁の嫉妬で訪問できなかったのが真相」と注す。>とある。また、「ほどにてなむ」は<係助詞「なむ」の下に、できなかった、という意の言葉が省略された形。>との注釈もある。

日ごろも(普段も)、そこはかとなく紛るることはべりて(何かと忙しくしておりまして)、思ひたまふる心のほどよりは(私がご心配申し上げている気持の程よりは)、こよなくおろかに御覧ぜらるることの(ひどく冷淡にお思い頂きかねないのが)、苦しうはべる(気懸かりです)」

など(などと大将は)、聞こえたまふ(お応え申しなさいます)。

[第三段　夕霧、落葉宮に面談を申し入れる]

宮は、奥の方にいと忍びておはしませど(宮は部屋の奥の方にごくひっそりとしていらっしゃるが)、ことことしからぬ旅の御しつらひ(簡素な仮住まいの)、浅きやうなる御座のほどにて(狭い部屋のことなので)、人の御けはひおのづからしるし(その気配は大将にもはっきりと分かります)。いとやはらかにうちみじろきなどしたまふ御衣の音なひ(とても物静かに身じろぎなさる時の衣擦れの音を)、さばかりななりと(それが宮に違いないと)、聞きゐたまへり(大将は聞き座していらっしゃいました)。

心も空におぼえて(大将は浮き立つ気分で)、あなたの御消息通ふほど(御息所との挨拶を取り次ぐ際の)、すこし遠う隔たる隙に(少し遠くて手間取る間に)、*例の少将の君など(いつも宮との取次ぎをする少将の君などの)、さぶらふ人びとに物語などしたまひて(接待係の女房たちに話をなさって)、　*「れいの」と言っても、私には馴染みは無いが、「せうしゃうのきみ」は柏木巻五章五段に出ていた宮の取次女房らしい。注には<『完訳』は「落葉の宮づきの女房。小少将。御息所の姪で、その養女格。大和守の妹」と注す。>とある。

「かう参り来馴れ*承ることの(このように参じ来馴れるのを許され申し上げる事が)、年ごろといふばかりになりにけるを(数年来となるのに)、こよなうもの遠うもてなさせたまへる*恨めしさなむ(まるで余所余所しく応対なさる情けなさというものは)、かかる御簾の前にて(このように御簾の前で)、人伝ての御消息などの(人伝ての取次ぎで)、ほのかに聞こえ伝ふることよ(遠回しにお話しするということで)、まだこそならはね(未だかつて経験の無いものです)。いかに古めかしきさまに(何と古風な人かと)、*人びとほほ笑みたまふらむと(宮や御息所が私を笑っていなさるだろうと)、はしたなくなむ(恥ずかしくなります)。　*「うけたまはる」は＜受けさせて頂く＞だから、何か用命を受ける、という語感だが、故藤大納言に宮の世話焼きを頼まれた、という事情があるにしても、「かう参り来馴れ」るには、宮側からの承認や受諾を示された、という自負があってのことだろうし、それは＜許されている立場の主張＞なのだろう。　*「うらめしさなむ」の「なむ」は係助詞で「ほのかに聞こえ伝ふる」という言い方で主題の「うらめしさ」を説明しているが、その「聞こえ伝ふる」が更に「ことよ」と主題化されて「まだこそならはね」と述辞される、という構文なので「ならはね」までは句点が打てない、と思う。　*「人びと」は「ほほ笑みたまふらむ」と敬語遣いされているので＜宮と御息所＞なのだろう。

齢積もらず軽らかなりしほどに(年も若く身分も低い内に)、ほの好きたる方に*面馴れなましかば(幾らか恋愛経験に馴れていたなら)、かううひうひしうもおぼえざらまし(こう不慣れな振る舞いは致さなかっただろうに)。さらに(何年も通いながら、今さらに)、かばかりすくすくしう(このように堅苦しく)、*おれて年経る人は(工夫も無いまま漫然と年を経る者は)、たぐひあらじかし(他にはいないだろう)」　*「面馴れなましかば」は注に＜「ましかば」--「まし」反実仮想の構文。＞とある。　*「おる」は「愚る」と漢字表記され＜愚かになる。心を奪われる。＞と大辞泉に説明される。無策で呆然としている、ということだろうか。「おる」が「折る(をる)」とは違う音には思うし、「下る」の連用形なら「おりて」になるのだろうが、現代語に繋がる語が分からず、さっぱり語感がつかめない。先に弁君の失敗例が述べられていたので、それを踏まえれば＜馬鹿正直に故藤大納言の遺言通りに従って＞みたいな意味もある気がするが、下文との繋がりからして、どうもこの語は「げに、いとあなづりにくげなるさましたまひつれば」の振りになっているように見えて、きっと面白い言い換え方があるに違いない気がするが、分からなくて不愉快だ。

とのたまふ(と仰います)。げに(確かに大将は)、いとあなづりにくげなるさましたまひつれば(とても軽々しく応対し難い立派な態度をしていらっしゃるので)、*さればよと(是は忍びの手引きを頼むでもなく正攻法で宮の直答を迫っていらっしゃるのだとして)、　*「さればよ」は＜やはりそうか＞と予想的中の言い方の場合が多いようだが、此処では大将の言葉通り「げに」と女房たちが納得しているので、源君の言い分を其の侭受けて、とっくに忍びの手引きを頼んで宮の御簾内に居ても良さそうなものを、こうして律儀に御簾の前に座している大将殿を、これは愈々正攻法で宮に迫る心算なのだ、と少将の君たちが理解した、と読むべきかと思う。

「なかなかなる御いらへ聞こえ出でむは(私たちのような女房の取次ぎでお応え申し上げるのは)、恥づかしう(気が引けます)」

などつきしろひて(などと宮の女房たちは相談して)、

「かかる御愁へ聞こしめし知らぬやうなり(宮様がお返事申し上げなさらないでは、こうした大将殿の御訴えをお聞き分かりなさらないことになってしまいます)」

と、宮に聞こゆれば(と宮に申し上げると)、

「みづから聞こえたまはざめるかたはらいたさに(母上がご自身で返答なさることが出来ない心苦しさに)、代はりはべるべきを(娘の私が代わってご返答申し上げるべき所ながら)、いと恐ろしきまでものしたまふめりしを(大変重く病に苦しみなさるような母を)、見あつかひはべりしほどに(看病致していた内に)、いとどあるかなきかの心地になりてなむ(私も次第に変調を来たしまして)、え聞こえぬ(とてもお応え申し出来ないのです)」

とあれば(と宮の言葉の女房取次ぎがあったので)、

「こは、宮の御消息か(それが宮の御意向か)」と*ゐ直りて(と大将は御簾内の宮に聞こえるように、改めて座りなおして)、　*「居直る」は＜居ずまいを正す＞。事改めて場に望む姿勢だ。下文の「心苦しき御悩みを」の注に＜以下「本意なき心地なむ」まで、夕霧の詞。「御悩み」は御息所の病気。『完訳』は「以下、宮に直接話しかける趣。宮の居場所の近さを知っている」と注す。＞とある。ということは、この場の設定を臨場感を持って理解する宮廷読者たちに対しては、この「居直り」は＜御簾内の宮に聞こえるように姿勢を正す＞という意味で語られていると解し、左様に明示補語する。

「心苦しき御悩みを(御息所のご病状を)、身に代ふばかり嘆ききこえさせはべるも(私の身に代えてもとばかりにご平癒願い申し上げておりますのも)、*何のゆゑにか(どういう理由かと申せば、)。　*「何のゆゑにか」は注に＜『完訳』は「ほかならぬ、あなたのため」と訳す。＞とある。今でも普通に「何の為か」と言えば、自明の理由を強調する＜それ以外に理由はない＞という意味だが、此処では下に「推し量りきこえさするによりなむ」と「ゆゑ」が明示されている構文なので、「か」は問題提起の係助詞として此処で句点は打たず読点で下に繋がる、と読むべきだろう。ただ、この言い方の語感としては、この場は少し声を張れば宮に直接大将の声が聞こえる近さ、という舞台設定であるものの、形式上は女房に対して源君は話している、という事情は汲むべきだ。つまり「自明の理由」は＜宮の為＞ということであり、それが源君の宮への懸想だということも衆人周知ではあるが、この正攻法の姿勢を保ったままの大将の言質としては、故藤大納言に託された＜宮の御世話の一環＞という重さを掛けた言い方として響いている筈だ。近頃はこういう迫り方や口説き方を地位利用とかパワハラとか言って嫌悪してみるような風潮があるようだが、また確かに強引な犯罪行為も中にはあるのだろうが、基本的に地位や立場を前提としない存在は物理的に有り得ないのであって、源氏殿や藤原殿の奔放な女性遍歴などと言っても、所詮はその地位や身分があった上での事であり、相手の女も貴族で無ければ只の遊び女扱いだし、それらの女自身も当然に自分の地位の自覚や相手の値踏みをしていて、だからこそ変化に富んだ人間模様が織り成されているわけで、発情に数理定理の証明は必要がなく、恋愛を含む人間関係に於いては、その個別事情に於いて各個体は価値観や目標の共有や補完関係を他者に頼って生きる他は無く、子育てに於いても責任や責任感を殊更問題にせずとも、この広い世界にあって、いや昨今の認識では、この広い宇宙にあって、と言うべきか、何れ個体が関与する空間は自ずと限られるので、大将ほどの地位の人物にそれなりの礼を持って世話を受けている女が、いつまでも男同士の友情は厚いなどという無責任な認識をしているとしたら、この二の宮は余りに稚拙だし、宮をそういう世間知らずにして置くのは取り巻き女房たちの殆んど背信とも言うべき怠慢だ。

かたじけなけれど(勿体無くも)、*ものを思し知る御ありさまなど(分別のある御息所が)、はればれしき方にも*見たてまつり直したまふまでは(宮が晴れて新しい御成婚をお上げ頂き直しなさるまでは)、平らかに過ぐしたまはむこそ(ご存命でいらっしゃる事が)、*誰が御ためにも頼

もしきことにははべらめと(誰にとっても頼もしいことに違いないと)、推し量りきこえさするによりなむ(お察し申すからなのです)。　*「ものを思し知る御ありさま」は＜母御息所＞。　*「見たてまつり直したまふ」は＜未亡人宮＞。　*「たがおんため」は「御ため」と敬称しているので、大将は宮と御息所のことを指した形だが、聞いた女房たちは「たが」の筆頭は大将だと認識する言い方、なのだろう。

ただあなたざまに思し譲りて(私の今日の参上を、ただ御息所の御見舞いと思い譲りなさって)、積もりはべりぬる心ざしをも知ろしめされぬは(長年に渡って積もって来ている宮への好意をお分かり頂けないとしたら)、本意なき心地なむ(不本意です)」

と聞こえたまふ(と申しなさいます)。「げに(大将殿の仰る通りです)」と、人びとも聞こゆ(と女房たちも宮に申し上げます)。

［第四段　夕霧、山荘に一晩逗留を決意］

日入り方になり行くに、空のけしきもあはれに霧りわたりて、山の蔭は*小暗き心地するに、*ひぐらしの鳴きしきりて、*垣ほに生ふる撫子の、うちなびける色もをかしう見ゆ(日暮れ時分になって空の遠景に霧が掛かり山間いの里では暗さを感じるものだがヒグラシがうるさく鳴く中に垣根に咲いた撫子が風になびく姿も風情があります)。　*「小暗し」の「小(を)」は＜少し＞という意味の接頭語らしいが、何か変化が始まった印象を示す言い方として＜少し＞とか＜ちょっと＞とか言うのは日本語だけの語用でもない気がする。　*「ひぐらしの鳴きしきりて」は＜「ひぐらしの鳴きつるなべに日は暮れぬと思ふは山の蔭にぞありける」（古今集秋上、二〇四、読人しらず）＞と参照指摘がある。「鳴きつるなべに」は＜鳴くのに連れて＞という言い方らしく、ヒグラシが鳴くのに連れて日暮れてしまうと思うほど早く暗くなる山道の寂しさだ、みたいな旅路の風情を詠んだ歌だろうか。何か他に暗号めいた意味があるのだろうか。読人しらずの詞書無しでは取り付く島もなく、取り敢えずは、山間の早い夕暮れにあっても、大将はいくぶんと浮き立つ気分だった、と解して置く。ただ、「鳴きしきりて」はそれ以上に、むしろ早い夕暮れを待っていた、という大将の積極性を示しているのかも知れない。　*「垣ほに生ふる撫子の」は＜「あな恋し今も見てしが山賤の垣ほに咲ける大和撫子」（古今集恋四、六九五、読人しらず）＞と参照指摘がある。「今も見てしが」は＜直ぐに会いたいものだ＞という言い方らしく、「やまがつのかきほ」には気安く交じ合える王家には無い親しみ易い響きがある。「うちなびける色」は、大将の宮への普段の余所余所しい応対とは違う持て成しを期待する気持、を表わした表現なのだろう。となると、俄然作者は色めいた場面展開を演出していることになる。

前の前栽の花どもは心にまかせて乱れあひたるに(前庭の植え込みの花々が思い思いに咲き乱れている山荘に)、水の音いと涼しげにて(川の水音がとても清らかに聞こえて)、山おろし心すごく松の響き木深く聞こえわたされなどして(山おろしの風が凄い勢いで松林を吹き抜ける響きが鳴り響いたりして)、*不断の経読む、時変はりて、鐘うち鳴らすに(絶え間なく平癒祈願の読経を上げる不断経の僧の交替時間となって鉦が打ち鳴らされる時に)、立つ声もゐ変はるも、一つにあひて、いと尊く聞こゆ(番を終えて立つ僧と新たに座る僧の読経の声が一つに合ってとても厳かに聞こえます)。　*「ふだんのきゃう」は大辞林に「不断経(ふだんぎゃう)」として＜冥福・追善・安産のため一定の期間を決め、昼夜間断なく大般若経・最勝王経・法華経などをよむこと。＞とある。

所から(山荘という場所柄で)、よろづのこと心細う見なさるるも(全ての事柄が心細く見えて来るのも)、あはれにもの思ひ続けらる(大将には感傷的に感じられます)。出でたまはむ心地もなし(お帰りなさる気がしません)。

*律師も、加持する音して、陀羅尼いと尊く読むなり(やがて、修験僧も祈祷を上げる声がして真言密教を厳かに読み上げます)。いと苦しげにしたまふなりとて(すると、御息所がとても苦しそうにしなさっているようだと)、人びともそなたに集ひて(女房たちも病室に集って)、おほかたも、かかる旅所にあまた参らざりけるに(もともとこのような仮住まいに多くは御供していなかったので)、いとど人少なにて、宮は眺めたまへり(ますます部屋には人が少なくなって、宮は手持ち無沙汰にしていらっしゃいました)。　*「律師(りっし)」は僧官の身分の一つで＜僧綱(そうごう)の一。僧正・僧都(そうず)に次ぐ僧官。正・権の二階に分かれ、五位に準じた。＞と大辞泉にあるが、一般的に＜戒律に通じた僧。＞ともあり、「陀羅尼(だらに、梵語原文経文) いと尊く読む」という霊験性の印象から敢えて＜修験僧＞と言って置くが、王家の加持を勤める者であってみれば自ずと身分は高い筈で、同時に叡山の高僧ではあるのだろう。この言い換え文に於いて、私自身の分かり易さを優先することは主眼目に適う訳だが、実態の分からない事物は本来は原文のままにして置くのが無難ではあり、こういう語の処置にはとても迷う。それでも、「律師」を＜律師＞のままにして置くのは未消化感が強すぎる。

しめやかにて(辺りが静まり返り)、「思ふこともうち出でつべき折かな(気持を打ち明けるべき時のようだ)」と思ひゐたまへるに(と大将が思って座って居なさると)、霧のただこの軒のもとまで立ちわたれば(霧がこの山荘の軒まで下り掛かって来たので)、

「まかでむ方も見えずなり行くは(帰り道も見えなくなってしまうので)、いかがすべき(どうしたものだろう)」とて(と前置きして)、

「山里のあはれを添ふる夕霧に、立ち出でむ空もなき心地して」(和歌 39-01)

「この美しい夕霧に、帰る気なんて起こらない」(意訳 39-01)

*「まかでむ方も見えずなり行くは如何すべき」という前置きを踏まえれば、「空もなき」の「空」は＜天＝正しい道しるべ＞の意味になりそうだ。が、そんな堅苦しい詠み方では、如何にも大将らしいツマラナサは表現出来ても、「山里のあはれを添ふる夕霧」に何らの艶っぽさを込められない。だから、「空もなき」は＜さらさらない＞という強調語の洒落語用という、いく分と軽口めいた言い方になっているのだろう。そうすれば、「山里のあはれを添ふる夕霧」という言い方に＜あなたの魅力が増すこの夜の風情に＞という意味を伝える事が出来るし、その詠み方の軽妙さに堅苦しさを逆手取った親しみを込めることも出来る。ところで、この歌が巻名の元に成るのは良いとして、源君大将を＜夕霧＞と便宜呼称する元に成っているとしたら、それは大いに疑問だ。此処では「山里のあはれを添ふる夕霧」と詠まれていて、それは明らかに未亡人宮を指している。詠み手は大将だが、「夕霧」の対象体が違うのだから、そんな乱暴な語用が有って良い筈はないだろう。

と聞こえたまへば(と宮に贈歌なさると)、

「山賤の籬をこめて立つ霧も、心そらなる人はとどめず」(和歌 39-02)

「山に足止めする霧も、浮気者には通じない」（意訳 39-02）

*贈歌の「空もなき心地」に反応して「心そらなる人」と詠み返したことで二人の会話は成立した。大将の「空もなき」は＜道しるべが無い＞と＜さらさらない＞の掛詞だったが、宮の「心空成る」の「空」は＜からっぽ、空洞＞ないし＜虚言、嘘＞を意味していて、軽口に軽口で返すという親しみが通い合う。ただ、軽口の冗句という場の和みを外して歌筋を見れば、「やまがつのまがきをこめてたつきりも（山荘の垣根に立ち込めた霧も）こころそらなるひとはとどめず（誠意の無い人は引き留めません）」という突き放しで、だからこそ冗句なのだが、是を突き放しの厭味と逆手取った上で、大将は続く下文で逗留の口実にするという話運びだ。それにしても、この贈答歌の遣り取りは少なからず意外だ。藤君の死後二年半ほどになるが、今まで内心はともかく形の上では二人は互いに、源君は故藤大納言の友人の態を保ち、宮は未亡人の態を保って、夜の忍び通いをする関係にはならず、歌の贈答もこれが初めての筈は無いが、以前は季節柄の挨拶程度の情景読みで取り繕っていた、ような印象を語り口から受けていて、それにしてはこの場面で否に砕けた応酬の印象がある歌の贈答だからだ。勿論、互いに既婚者であり、源君は 29 歳、宮は推定だが 26 歳以上ではありそうで、それなりに練れた言い回しが出来て不思議は無いが、それでもこの贈答歌には唐突感がある。二人の距離感について、作者の説明不足を感じるのは私が当時や雲上世界の事情を余りにも知らないからだけでもなさそうな不満を覚える。

ほのかに聞こゆる御けはひに慰めつつ（こう御返歌なさるのが御簾内から微かに聞こえる宮の気配に心和んで）、まことに*帰るさ忘れ果てぬ（大将は本当に帰る道を見失ってしまったのです）。*「かへるさ」の「さ」は勢いのある語感の接尾語で＜そういう指向性、方向性、動向、及ぼす影響や範囲＞などを想起させるように見える。多くは形容詞の語感に「優しさ」「醜さ」などと付くようだが、この「さ」は＜さま（形態）＞というよりは＜～ということ＞といった広い概念認識を示している、かと思う。で、「帰るさ」も普通は＜帰る時、帰り道＞の意味で語用されるようだが、語感としてはその周辺事情も含めた情緒のある語に思えて、此処でも＜帰ることを忘れた＞という意味で＜帰り道を見失った＞と言って置く。こういう時に使う「まことに」の洒落語用は今も変わらない。

「*中空なるわざかな（どっちつかずで困りました）。家路は見えず（霧が立ち込めて足元が見えず家路が分からないというのに）、霧の籬は（一方で垣根を塞ぐ霧は）、立ち止るべうもあらず遣らはせたまふ（旅人を立ち入らせないように追い返そうとなさる）。つきなき人は（運の悪い者は）、かかることこそ（こういう目に遭うものなんですね）」　*「なかぞら」は＜中途半端、どっちつかず＞。此処では＜空尽くし＞の言葉遊びで話が進むが、この物語には既に同様の言葉遊びで話が進む場面がいくつかあったように思う。そういう着眼点はこの作者の特徴の一つかも知れないが、実際に言葉の弾みで世の中が動くという事は良くある、というか、見方によっては、そういう事でしか世の中は動かない、とまで言えそうな気さえする。勿論、言葉に誤解や錯覚は付き物なので、いつも良好な結果に成るわけではないだろうが、事態の転換や展開は人間社会にあっては、結局は想念の共有やら共通概念やらに今までとは違う何かが作用しなければ実現したことにならない、という言い方に一理は有りそうだ。

など*やすらひて（などと大将は宮の応対に一安心して、居ずまいを崩して）、忍びあまりぬる筋もほのめかし聞こえたまふに（隠し切れない恋心もほのめかし申しなさると）、年ごろもむげに見知りたまはぬにはあらねど（宮も数年来の大将の恋心を全く気付かないではなかったが）、知らぬ顔にのみもてなしたまへるを（気付かない振りをして応対申しなさってきたのだが）、かく言に出でて怨みきこえたまふを（このように言葉に表わして訴え申しなさるのを）、わづらはしうて

(応じかねて)、いとど御いらへもなければ(何のお返事も無いので)、いたう嘆きつつ(大将はとても不満ながら)、心のうちに、「また、かかる折ありなむや」と、思ひめぐらしたまふ(内心では今がまたとない機会だから此処で宮を抱こうとあれこれ算段を回らしなさいます)。 *「やすらふ」は＜ためらう、躊躇する＞また＜立ち止まる、たたずむ、休む、憩う＞と古語辞典にある。ただ、此処では三段にあった「こは宮の御消息か、とゐ直りて」という描写に呼応した文脈にある語用に見える。三段では宮が大将を敬遠しようとした姿勢を見せたことに対して、大将は宮を正そうと構え直したのであり、此処では歌の贈答で宮が呼応したことで、相手を努める姿勢が宮に見えたと大将は安堵して一息吐いた、という描写だから＜居ずまいを崩した＞と読むべきなのだろう。

「情けなうあはつけきものには思はれたてまつるとも(無風流な軽薄者に思われ申そうとも)、いかがはせむ(構わない)。思ひわたるさまをだに知らせたてまつらむ(思い続けて来た事だけでもお知り頂きたい)」

と思ひて、人を召せば(と思って大将が供人を呼び出すと)、*御司の将監よりかうぶり得たる(大将所管の近衛府の三等官で殿上に出世した)、睦ましき人ぞ参れる(近臣が参りました)。忍びやかに召し寄せて(大将は近くに呼び寄せて小声で)、 *「おんつかさ」は＜大将の所管官庁＝近衛府＞。「将監(しゃうげん)」は近衛府に於ける三等官(判官＝じょう、ぞう)の呼称、とのことで、読みも「ぞう」とある。

「この律師にかならず言ふべきことのあるを(今来ている高僧に是非とも話したいことがあるのだが)、*護身などに暇なげなめる(僧は護身法の念誦に余念がなさそうで)、ただ今はうち休むらむ(今のところは休んでいるらしい)。今宵このわたりに泊りて(そこで私は、今宵は此処に泊まって)、*初夜の時果てむほどに(初夜の勤行が終わる頃に)、かのゐたる方にものせむ(高僧の所に行って会おうと思う)。これかれ、さぶらはせよ(この者とこの者を控えさせて置け)。随身などの男どもは(護衛官たちは)、*栗栖野の荘近からむ(栗栖野の荘園が近いので)、*秣などとり飼はせて(其処で馬に餌などを食わせて)、ここに人あまた声なせそ(此処で多くの者の声が立たないようにせよ)。かやうの旅寝は(こうした御息所の療養の山荘に男どもの一行が旅寝したとなると)、*軽々しきやうに人もとりなすべし(軽率な事があったように世間が取り成しかねない)」 *「護身(ごしん)」は「護身法(ごしんぼふ)」のことらしく、「護身法」は＜密教で、修法などに際し、まず行者が自分の心身をきよめて身を堅固に守護する法。ふつう、印を結び、陀羅尼(だらに)を唱える。＞と大辞泉にある。護身して物の怪と対決する、ということなのだろう。 *「初夜(そや)」は＜六時の一。戌(いぬ)の刻。現在の午後8時ごろ。宵の口。また、その時刻に行う勤行(ごんぎょう)。しょや。＞と大辞泉にある。初夜の勤行が「果てむほど」というと午後9時ごろだろうか。今はまだ夕方らしいので午後5時くらいの話だろうか。山里の小野から帰途に着くには最終の刻限あたりなのだろう。此処で指示が無いと部下たちが困る、という時刻か。源氏殿の惟光の登場場面が想起される。 *「栗栖野の荘(くるすののさう)」は＜小野の近くにある夕霧の荘園。＞と注にある。 *「秣(まぐさ)」は＜馬の草＝馬の餌＞。 *「軽々しきやうに人もとりなすべし」は＜私は機に乗じた儀に及ぶ心算だ、左様心得よ＞という意味の隠語のように聞こえる。

とのたまふ(と仰います)。*あるやうあるべしと心得て(将監は事情を察して)、承りて立ちぬ(指示を聞いて下がりました)。 *「あるやうあるべし」は＜およそ見当が付く＞という意味で、大将が持ち出した律師の件は、将監にではなく、この場の女房たちに対する逗留の口実だということを、将監は察して、実質の話意は「これかれさぶらはせよ」だと心得た、という話なのだろう。

［第五段　夕霧、落葉宮の部屋に忍び込む］

「*さて（さて、そういうわけで）、道いとたどたどしければ（夜道の他所との往復は厄介なので）、このわたりに宿借りはべる（この山荘に宿を借りることに致します）。同じうは（どうせなら）、この御簾のもとに許されあらなむ（このまま御簾の前にお許し願いたい）。阿闍梨の下るるほどまで（阿闍梨の念誦が終わるのを待つ間ですから）」　*「さて」は渋谷校訂では、大将の発言外として口語括弧の前の場面説明の地文の＜そして＞という言い方の接続詞語用に調整してある。が、逗留を＜律師に話があるからという理由を口実に御膳立てした＞のは大将自身であり、此処では供人を下がらせてから宮とその女房たちに話し掛ける場面運びでの、大将の発言から成る呼び掛けや言い出しの＜さて、そういうわけで＞という副詞語用と見るほうが話し手の語りの流れとして自然に見える。また同様に大将は、将監への説明を女房たちにも聞こえるように話したのであり、小声にしたのは尤もらしい体裁を整える演出の常套手段に過ぎないのだから、「道いとたどたどしければ」は＜帰り道が覚束無いから＞なのではなく＜近くの栗栖野にある自分の山荘との往復も夜道では厄介だから＞という意味に成るのだろう。

など（などと大将は）、つれなくのたまふ（事務連絡のように事も無げに仰います）。

例は（いつもの大将は）、かやうに長居して（このように長居して）、あざればみたるけしきも見えたまはぬを（くだけた態度もお見せにならないのに）、「うたてもあるかな（疎ましいこと）」と、宮思せど（宮はお思いになったが）、ことさらめきて（そうかといって）、軽らかにあなたにはひ渡りたまふは（勝手に奥へ引き籠もりなさるのは）、人もさま悪しき心地して（無礼に過ぎる気がして）、ただ音せでおはしますに（災いを避けるように、ただ静かに音を立てないようにしていらっしゃったが）、とかく聞こえ寄りて（大将は宮に何かと話し掛けて）、御消息聞こえ伝へにゐざり入る人の影につきて（その取次ぎに居ざり入る女房の後ろに付いて）、入りたまひぬ（御簾内に入ってしまわれました）。

まだ夕暮の、霧に閉ぢられて、内は暗くなりにたるほどなり（まだ夕暮れの辺りが霧に隠されて部屋が暗くなり始めた時でした）。　*この文が、大将を＜夕霧＞と仮称する元なのだろう。

あさましうて見返りたるに（取次ぎ女房が驚いて振り向くと）、宮はいとむくつけうなりたまうて（宮は異変にひどく動揺なさって）、*北の御障子の外にゐざり出でさせたまふを（北の襖戸から部屋の外に居座り出であそばすのを）、いとようたどりて（大将はよくも追い着いて）、ひきとどめたてまつりつ（引き留め申し上げました）。　*「きたのみさうじのと」は注に＜母屋から母御息所のいる北廂間に通じる襖障子の向う側へ、の意。「出でさせたまふ」という最高敬語表現。＞とある。この山荘は小さな建物らしく、母屋と言うべき中央空間が無いか、あっても祭壇になっていて、宮は西廂を部屋にしていたように本章二段の配置説明を読んだが、何れにせよ、宮の部屋の北側は襖引戸で仕切られていて、宮は其処へ逃げようとした、ということらしい。また、先読みだが、この襖引戸は施錠出来るようになっていたらしく、北襖の錠というのは、以前にも何度か語られて来ていて、ずいぶん意味ありげに取り上げられる小道具のような印象だ。部屋の鍵で保たれている社会秩序、という主題は今日の暗号化社会於いてこそ其の脆さが危惧されているが、数理に高い価値観を与えているのは管理空間を大事に守り育てたいという人類の、また各個人の強い生存欲にある、というカギの本質に於いては初めから何ら変わらないだろう。とか言う事はどうでも良いとしても、こういう記述は当時の家屋構造や建具事情から見ても興味深いのかも知れない。

御身は入り果てたまへれど(宮は体は別室にすっかり入っていらっしゃったが)、御衣の裾の残りて(御召物の裾が残って)、障子は、*あなたより鎖すべき方なかりければ(襖戸は北側からは錠を鎖す事が出来ないので)、引きたてさして(閉めかかったままで)、水のやうにわななきおはす(水のように冷や汗を流して震えていらっしゃいます)。　*「あなたより鎖すべき方なかりければ」は注に＜落葉の宮は母屋の外側に出たので、外側からは錠が掛けられない。＞とある。「あなた」は＜部屋の外側＞を言っていて、文の視点は部屋側とは即ち大将側だ。

*人びともあきれて、いかにすべきこととともえ思ひえず(部屋に居る女房たちも呆然として如何して良いか考えが付かず、)。こなたよりこそ鎖す錠などもあれ(大将の居る此方側からこそ鎖す錠などもあるが)、いと*わりなくて(そのような強引な手立ては、とても無作法で)、荒々しくは(荒々しくなど)、え引きかなぐるべく*はたものしたまはねば(とても女房ふぜいが引き離せるような身分の方では決していらっしゃらない大将殿なので)、　*「人びと」は部屋側にいる女房たちなのだろう。で、「こなたよりこそ鎖す錠などもあれ」以下が、その女房たちの描写なのだろうから、「え思ひえず」では句点ではなしに、読点で下に続ける。　*「わりなし」は＜不都合、不合理＞。此処の語用は非常に分かり難く、文意から＜無作法＞を当ててみたが確かな手応えは無い。　*「はた」は改まって事物を殊更に強調する副詞で、「ものしたまふ」と大将源君の身分の高さに戸惑うことで、下の訴えを際立たせようと言う語り口のようだ。

「いとあさましう(何て乱暴な)。思たまへ寄らざりける御心のほどになむ(考えもしなかった殿のなさりようです)」

と、泣きぬばかりに聞こゆれど(と女房は泣き出しそうに訴え申すが)、

「かばかりにてさぶらはむが(私がこのように御近付き申すのを)、人よりけに疎ましう(他の人より特に疎ましく)、めざましう思さるべきにやは(目障りにお思いになるのでしょうか)。数ならずとも(物の数ではないとしても)、御耳馴れぬる年月も重なりぬらむ(私のことを聞き知って耳慣れた年月も重なっている筈ですが)」　*この大将の発言の敬語遣いからして、話意は女房への返事ではなく宮への語り掛けだ。

とて(と大将は宮に言って)、いとのどやかにさまよくもてしづめて(とても穏やかに慌てず落ち着いて)、思ふことを聞こえ知らせたまふ(恋情をお聞かせ申しなさいます)。

[第六段　夕霧、落葉宮をかき口説く]

聞き入れたまふべくもあらず(宮は大将の話を聞き入れなさる余裕も無く)、*悔しう(逃げ損ねたのが悔しく)、かくまでと思すことのみ(是で勝負が着いたのかとお思いに成るばかりで)、やる方なければ(余念が無いので)、のたまはむことはたましておぼえたまはず(お返事申すことなどまるでさらさら思いつきなさいません)。　*「くやしうかくまで」の文意については、注に＜落葉の宮の心中。『集成』は「不覚だった、こんなにまでこの人を近づけてしまってと、悔む気持ばかり先立って、やり場のない思いなので。皇女としての誇りが深く傷つけられた思い」。『完訳』は「こうまでもご自分をお見下しになるのかと」「夕霧のぶしつけな態度に自尊心が傷つけられた思い」と注す。＞とある。確かに宮は朱雀院の内親王として皇女の誇りがある、と言えばあるのかも知れない。しかし、夫であった藤君は衛門督であり、大納言の地位も実際には名誉称号扱いで、実質での地位は源君の大納言兼近衛大将の方が格上であり、また歌の贈答の詠み方から

して、宮には皇女の誇りというよりも、女三の宮にも似た皇女の世間知らず、子供っぽさ、があると読んでみるのも一興かと思う。「はたましておぼえたまはず」の「はた」も即物的な反応を示しているように見える。

「いと心憂く(全く心外な)、若々しき御さまかな(子供っぽいお振る舞いですね)。人知れぬ心にあまりぬる好き好きしき罪ばかりこそはべらめ(思い余った恋情ゆえの無礼ではあったでしょうが)、これより馴れ過ぎたることは(これ以上の手出しは)、さらに御心許されでは御覧ぜられじ(御許しがなければ致しません)。

いかばかり(どんなにか)、*千々に砕けはべる思ひに堪へぬぞや(言い出せない恋情の、千々に砕ける切ない思いに堪えて来たことか)。　*「ちぢにくだく」の言い回しについては、注に＜「堪へ」未然形。「ぬ」打消の助動詞。係助詞「ぞ」。間投助詞「や」詠嘆の意。『集成』は「君恋ふと心は千々にくだくるをなど数ならぬわが身なるらむ」（曽丹集）を指摘。『完訳』は「君恋ふる心は千々にくだくれど一つも失せぬものにぞありける」（後拾遺集恋四、八〇一、和泉式部）を指摘。＞とある。「堪へぬ」は「堪へ」連用形、「ぬ」強調の助動詞、の方が「いかばかり」に馴染む気がするが、間違いなのだろうか。また、二首の参照歌はどちらも「千々」を＜数量＞に見立てた面白い味わいだが、特に「一つも失せぬもの」には生き生きとした感性を感じる。

さりともおのづから御覧じ知るふしもはべらむものを(それでもあなたは私の恋情に自然とお気付きなさる節もございましたでしょうに)、しひておぼめかしう(敢えて知らん振りで)、け疎うもてなさせたまふめれば(余所余所しく応対なさるようなので)、聞こえさせむ方なさに(打ち明け申すことも出来ずに)、いかがはせむ(どうしたものか)、*心地なく憎しと思さるとも(思い遣りに欠けた無礼なこととお思いになっても)、かうながら朽ちぬべき愁へを(このまま実らずに朽ちてしまいそうな苦しい気持を)、さだかに聞こえ知らせはべらむとばかりなり(はっきりとお知らせ申し上げたいという一心なのです)。言ひ知らぬ御けしきの辛きものから(言い様も無くあなたの態度が辛いながらも)、いと*かたじけなければ(このような私の遣り方は、全く平謝りものでして)」　*「ここちなし」は＜思慮がない。分別がない。心ない。＞と大辞林にある。　*「かたじけなし」は大辞林に＜（身にあまる好意・親切に対して）感謝にたえない。ありがたい。＞または＜（分に過ぎた処遇に対して）おそれ多い。もったいない。恐縮だ。＞または＜恥ずかしい。面目ない。＞という語用が説明されている。何れにせよ、相手に対してではあっても、相手の事ではなく自分の気持を表明する語ではありそうで、此処では実力行使を本意では無いと釈明して＜恐縮している＞反省の弁と取って置く。注には＜『集成』は「これ以上のことには及ばぬ、という含意」と注す。＞とある。「これより馴れ過ぎたることは、さらに御心許されでは御覧ぜられじ」に倒置する、というのは「ば」の接続助詞を受ける構文上からも合理性はある。ただ、合理性よりは謝意を伝えたい気持を「いと」に込めた語り口ではあるのだろう。ところで、今日思い付いた「かたじけなし」の語意がある。「かた」は＜片一方→偏って→偏に、ひたすら＞という意味の接頭語。「じけなし」に似た語に「じくねる(ねじける)」という自動詞があって、是の他動詞が「じけなす(屈折させる)」だと仮定すると、その連用中止が「じけなし(曲げること)」となって形容詞化しそうな語感に見えて来る。即ち、「かたじけなし」は＜ひたすら謙らせる→平謝りする＞という形態形容が原義だ、というのはどうだろう。

とて(と言って大将は)、あながちに情け深う(努めて思い遣り深そうに)、用意したまへり(配慮を見せていらっしゃいました)。

障子を押さへたまへるは(宮が襖戸を押さえていらっしゃるのは)、いとものはかなき固めなれど(まるで頼りない守りだったが)、引きも開けず(大将は引き開けもせず)、

「かばかりのけぢめをと(これだけでも隔てようと)、しひて思さるらむこそあはれなれ(強く拒みなさるとは情けない)」

と、うち笑ひて(と笑って見せて)、うたて心のままなるさまにもあらず(勢いのままに力づくで事に及ぶことはありません)。

人の御ありさまの(初めて実感した、宮の御印象は)、なつかしうあてになまめいたまへること(柔和で上品で優美でいらっしゃる事が)、*さはいへどことに見ゆ(着物の裾を掴んだだけとは言え、さすがに格別の皇女らしさと大将には思えます)。　*「さはいへど」は注に＜『集成』は「そうは言っても（そう美しい方ではないといっても）格段にすぐれている。宮様だけのことはある」。『完訳』は「夫柏木の情の薄さから宮の容貌が劣ると推測した。それを受けて「さはいへど」」と注す。＞とある。ただ、この場面に即した「さは」は＜着物の裾を掴んだだけ＞とも読めるし、「宮様だけのことはある」と実感したとしても、それは衛門督を介した評価というより、二年余りと通っているのだから、自分が膨らませた＜皇女像＞に適う評価であり、「さはいえど」は現代語の＜さすがに＞と同義の語用かと思う。

世とともにものを思ひたまふけにや(未亡人として頼りなく暮らしていらっしゃった所為か)、痩せ痩せにあえかなる心地して(痩せてか細い感じで)、*うちとけたまへるままの御袖のあたりもなよびかに(普段着のままでいらっしゃる御袖のあたりもなよなよと和らげに)、気近うしみたる匂ひなど(気取らずに香が染みた匂いなどが)、取り集めて*らうたげに(全て合わさって可愛らしく)、やはらかなる心地したまへり(おとなしい感じでいらっしゃいました)。　*「うちとけたまへるまま」は注に＜くつろいだ姿、すなわち普段着のままの姿。＞とある。　*「らうたげ」は＜可愛らしい、いじらしい＞と庇護したくなるような語感なので、若年者や年下に対しての印象に使う語のように思う。私は宮は大将より三歳くらい年下に見ているが、宮の年齢は明示がなく何となく落ち着かない。

［第七段　迫りながらも明け方近くなる］

風いと心細う、更けゆく夜のけしき、虫の音も、鹿の鳴く音も、滝の音も、一つに乱れて、艶あるほどなれど、ただありのあはつけ人だに、寝覚めしぬべき空のけしきを、格子もさながら、*入り方の月の山の端近きほど、とどめがたう、ものあはれなり(八月末の風がとても心細く更けてゆく夜の風情は虫の音も鹿の無く声も滝の音も一つに交じり合って味わいがあるものだが、即物的な情緒を解さない軽薄な者でも目を覚ますほど見事に深まる庭の秋模様を格子窓を下ろさず開けたままで、宮が沈み掛かる月が山の稜線に掛かるようなほどの態度なのを引き戻しかねている大将は、何とも切ない)。　*「いりかたのつきのやまのはちかきほど」は＜沈み掛かる月が山の稜線に掛かる頃＞だが、是を時刻の描写とは読めない。仮に「八月中の十日ばかり」(二段)を＜8 月 21 日＞とすれば、下旬の弓月とは即ち下弦の月であり、月の出が真夜中の 0 時頃で月の入りは翌日昼の 12 時頃となって「更けゆく夜」の時刻に合致しない。かと言って、「入り方」を＜日没＞と読めば 18〜19 時くらいで時系列上は合うが、その時刻に「月」はまだ出て来ないし、先ず「更けゆく夜」と切り出した語り口からして、これを「日」と「月」の誤字とも読めない。と

いうことは、これは宮を「月」に例えた比喩の洒落口調であり、「とどめがたう」も＜堪えられない＞と＜引き留められない＞の掛詞だ。作者は「ほど」の曖昧表現で遊んでいるのだろう。

「なほ(今なお)、かう思し知らぬ御ありさまこそ(このように私の恋情に気付かないふりをなさるあなたの態度こそ)、かへりては浅う御心のほど知らるれ(むしろ思い遣りが無いと思われます)。*かう世づかぬまでしれじれしきうしろやすさなども(斯くも世間離れしているほど激情を遠慮申して白々しく礼を尽くし申してきた私の自制心ある穏やかな態度なども)、たぐひあらじとおぼえはべるを(類稀な良識人ぶりかと自負いたしますが)、何事にもかやすきほどの人こそ(近衛大将の私でさえ平伏して当たり前の、何でも容易く手に入る王家の人ならではの)、かかるをば痴者などうち笑ひて(こういう実直者を無粋だと侮って冷笑する)、つれなき心もつかふなれ(痛みを知らない気持なのでしょう)。　*「かう世づかぬまでしれじれしきうしろやすさなど」は注に＜夕霧自身の態度振る舞いをいう。『完訳』は「相手（女）に安心な男とする」と注す。＞とある。ただ、言い換えてみると＜好い人の押し売り＞みたいな率直さを欠く＜性根の悪さ＞が感じられて、大将自身が言うように、皇女にとっては嫌味にしか聞こえない、無神経な口説き文句なのかも知れない。

あまりこよなく思し貶したるに(あまりにも蔑みなさるので)、えなむ静め果つまじき心地しはべる(とても抑え切れない気になりました)。世の中をむげに思し知らぬにしもあらじを(男女の仲を全くお知りでないでもないでしょうに)」

と、よろづに聞こえせめられたまひて(と宮はいろいろな言い方で大将に言い寄られなさって)、いかが言ふべきと、*わびしう思しめぐらす(如何答えたものかと困って考えます)。　*「わびし」は＜当惑するさま。やりきれない。＞くらいの言い方に思うが、悲しみに耐えるとか無力さを噛み締めるような＜みじめ＞な語感があり、此処で宮にこのような気持を起こさせた事が今後の展開に問題になりそうな重要語キー・ワードのような気がする。

世を知りたる方の心やすきやうに(処女でないから気安いように)、折々ほのめかすも(大将が時々仄めかすのも)、めざましう(気に障って)、「げに、たぐひなき身の憂さなりや(本当に惨めな気分だわ)」と、思し続けたまふに、死ぬべくおぼえたまうて(と思い続けなさっては死にたくなりなさって)、

「憂きみづからの罪を思ひ知るとても(情けない罪のある私の宿命を思い知ったとしても)、いとかうあさましきを(これほどにあさましい大将の所業を)、いかやうに思ひなすべきにかはあらむ(如何考えたら良いか分からない)」

と、いとほのかに、あはれげに泣いたまうて(とほんの少し思わずお泣きになって)、

「我のみや憂き世を知れるためしにて、濡れそふ袖の名を朽たすべき」(和歌 39-03)

「なまじ男を知ったとて、流れ落ちても良いものか」(意訳 39-03)

*注に＜落葉宮の歌。『完訳』は「夕霧の「世の中を--あらじを」に対応。「濡れ添ふ」は、柏木との結婚で流した涙に、夕霧との仲で流す涙を添える意。「くたす」は評判を朽たす、涙で袖を朽たす、の両意。己が身の不幸を痛

恨する歌」と注す。係助詞「や」疑問の意は「朽たすべき」連体形に係る。＞とある。「袖の名」はやはり＜王家の誇り＞なのだろうか。確かに、そう解して歌筋は通る。「憂き世を知れるためし」が＜皇女が臣下と結婚した後に未亡人になった例＞であり、その情けない立場が「濡れそふ袖の名を朽たすべき（さらに臣下の言いなりになって王家の名を汚しかねない）」という事情は「我のみや（私だけなのか）」という嘆き節。しかし、王家の正統を引き継ぐのは帝位を襲う天子一人で、親王はその予備員になることはあるが、基本的に残りの親族は文化的様式や学術的研究また経済的支援に於いて、その王位およびその体制を補佐する役割を担うのであって、国家予算で賄われる王室家計は自ずと限りがあり、名目王家の極貧生活が少なくない実情からして、朱雀院が藤氏長者の次期惣領候補に娘を娶らせる判断はごく妥当なものだった筈だ。まして、源君の地位は実力こそ藤原氏同士の均衡図式の上にあるものの、その文化的血統は頭抜けていて、王家の婿に不足は無い。「名を朽たす」という言い方は＜節度を守るべき社会的地位のある者が不道徳な行いをして家名を傷付ける＞という意味だろうが、「我のみや」という宮の詠み方では、客観的に＜悪評が立つ→不名誉に思う＞という社会的認識というよりは、主観的に＜名に恥じる→惨めに感じる＞という個人的感情が色濃い。であれば、「憂き世を知れるためしにて」は＜なまじ男を知った体ゆえ＞みたいな身売り女郎の被害者意識を子供っぽく膨らませた言い方に見えなくもない。で、「濡れそふ袖の名を朽たすべき」も＜自堕落に男を渡り歩く＞という召人気分に勝手に落ち込んでいる、とも取れる。末摘花巻の大輔の命婦については強烈な印象があるが、王家血筋の召人は少なくなかったのかも知れない。が、宮ほどの恵まれた身分の女が簡単に夢想して浸れるような生活感ではないだろうに。それさえも手に入ると思う世間知らずの子供っぽさ、みたいな現実逃避にさえ見える。いやしかし、宮ほどの年回りの女が是を口にしたら、子供っぽいと言うよりは、むしろ色っぽく聞こえるのではないか。大将のような公人の認識では、宴席に侍って場を盛り上げるという役割の人物は組織運営上不可欠で、それは女の主要な務めの一つであり、是を無闇に軽視する風潮は困りものだ。人生楽あれば苦あり、苦あれば楽あり、で豊かに過ごせる。男も女もバカになってこそ、命懸けで働ける、というものだろう。楽だけ、苦だけ、バカだけ、シメツケだけ、では中身が無い。

とのたまふともなきを（と言うでもなく漏らしなさるのを）、わが心に続けて（その宮の気持を読んで）、*忍びやかにうち誦じたまへるも（大将が静かに復唱なさるのも）、かたはらいたく（きまり悪く）、いかに言ひつることぞと（如何して口にしてしまったのだろうと）、思さるるに（宮がお思いになると）、　*「忍びやかにうち誦じたまへる」は注に＜主語は夕霧。よく聞き取れないないところを推測して補い一首に仕立て上げて口ずさんだ。＞とある。であれば、「わが心に続けて」は＜宮の気持を類推して→読んで＞だろうか。にしても、確かに主語の分かり難い文だ。主語の分かり難さは決して此処だけではないが、敬語遣いだけでは判別し難く、文意を確かめながらやっと分かるという紛らわしさで、こういうのは文字よりも語りの方が分かり易いのかも知れない。ただ、「いかに言ひつることぞ」は内心文括弧に校訂しても良さそうだ。

「げに、悪しう聞こえつかし（実際、悪口に聞こえました）」

など（などと大将は）、ほほ笑みたまへるけしきにて（微笑んで見せなさる含みのある表情で）、

「おほかたは我濡衣を着せずとも、朽ちにし袖の名やは隠るる　（和歌 39-04）

「私が袖を引く前に、濡れていたのは知ってます　（意訳 39-04）

*注に＜夕霧の返歌。「濡れ添ふ袖」「名を朽たす」の語句を受けて、「濡衣」「朽ちにし袖」と返す。「名やは隠るる」反語表現、汚名は歴然としているではないか、と切り返した。『完訳』は「すでに汚名を立てたのだから、

自分との間に悪評を立てても構わぬではないか、の意。宮を傷つける歌だが、宮の微妙な心の動きを顧慮しない」と注す。＞とある。が、そんな憎まれ口を言うんなら、と含み笑いをしながら大将は宮に返歌しているのだから、是は初めから冗句だし、それも相当に下品なイヤラシイ、少なくも大将は大人の会話の心算で宮を情交に誘っているのだろう。それなりに大人っぽい歌詠みを宮がした、と大将は思ったからだ。とは言え、確かに歌筋としては「朽ちにし袖の名」は＜落ちた家門の名誉＞であり、その汚名は私が「濡衣を着せずとも」既に疑いではなく、実際に宮は臣下との既婚者なのだから「隠るる」べき筈もない、という悪口雑言に違いなく、だからこそ其れが言える近しさの表現なのであり、また「濡衣を着す」の＜濡れ衣を着せる→あらぬ疑いを負わせる→無実の罪を着せる＞という常套句を引き出す前振りに宮の「濡れ添ふ袖」「名を朽たす」が詠まれていた、という作者の構成上の上手さには確かな職人芸を見る思いだ。というのも少なからず先読みの小賢しさで、この夜には宮と大将の情交は無かったが、傍目には契りが交わされた、と見える大将の朝帰りで宮に＜濡れ衣が掛かる＞という話運びが知れているので、「濡衣（ぬれぎぬ、ぬれごろも）」が主題語のキー・ワードに設定されていて、私にもこの時点で「濡衣を着す」を言う重要さが分かるからだ。尤も、この「濡衣」や「濡衣を着す」という印象深い語が、むしろ先の話の展開を予測させる、と言えるのかも知れない。

ひたぶるに思しなりねかし（流れ落ちても良いでしょう、その気になってしまいなさいな）」

とて、月明き方に誘ひきこゆるも（と言って大将が月明かりの差す窓辺に誘い申しても）、あさまし、と思す（宮は、はしたない、とお思いになります）。心強うもてなしたまへど（宮は気丈にしていらしても）、*はかなう引き寄せたてまつりて（大将は容易く引き寄せ申し上げて）、　*「はかなう引き寄せたてまつりて」とは随分あっさりと言うものだ。まぁ、実際はそんなところだろうが、裾を掴んだ緊迫場面からの展開がもう少し丁寧だと、より深い機微が味わえそうな気がして、何となく惜しい。

「かばかり*たぐひなき心ざしを御覧じ知りて（これほどに誠意ある私の恋情をお分かり頂いて）、心やすうもてなしたまへ（安心なさって下さい）。御許しあらでは、さらに、さらに（御許しが無ければ、決して無理強いは致しません）」　*「たぐひなき心ざし」は何のことか分からない。「心安し」から逆推して＜誠意＞かと当て込む。

と、*いとけざやかに聞こえたまふほど（と否にきっぱりと申しなさって宮の御許しを待つ内に）、明け方近うなりにけり（明け方近くになってしまいました）。　*「いとけざやかに」の語感が分からない。「けざやか」は＜［形動］［文］［ナリ］際立っているさま。はっきりとしているさま。＞と大辞泉にある。「さらに、さらに」は＜決して無理強いはしない＞という言い方なので、是をこういう色事の場面で＜はっきり＞断るのは、事務連絡ではないのだから、何かワザトラシサを感じる。が、その意図が分からない。大将の変に堅い気性を表現しているのだろうか。自信過剰なのか。ともあれ、宮の承諾を待つ姿勢ではありそうなので、「ほど」は＜そうしている内に＞と読んで置く。

［第八段　夕霧、和歌を詠み交わして帰る］

月隈なう澄みわたりて（月は雲に隠れることなく澄み渡って）、霧にも紛れずさし入りたり（霧に紛れることもなく光は山荘に差し込みます）。浅はかなる廂の軒は（短い廂の軒は）、ほどもなき心地すれば（空が近くて）、月の顔に向かひたるやうなる（月をまともに向かい見るようで）、あやしうはしたなくて（その明るさが妙にきまり悪くて）、紛らはしたまへるもてなしなど（顔を隠

していらっしゃる宮の仕種などが)、いはむかたなくなまめきたまへり(言いようも無く色っぽくていらっしゃいます)。

故君の御こともすこし聞こえ出でて(大将は故人の話も少し持ち出して)、さまようのどやかなる物語をぞ聞こえたまふ(当たり障りのない無難な話をなさいます)。さすがになほ(とは言えそれでも)、かの過ぎにし方に思し貶すをば(宮が自分を亡き夫ほどには大事に思い下さらないのを)、恨めしげに怨みきこえたまふ(不満気に訴え申しなさいます)。

御心の内にも(宮の御内心にも)、かれは、位などもまだ及ばざりけるほどながら(故人は地位などもまだ十分な高さではなかったが)、誰れ誰れも御許しありけるに(父朱雀院も母御息所もお認めになった人なので)、おのづからもてなされて(自然な事の運びで)、*見馴れたまひにしを(結婚なさったのだが)、　*「見馴れたまひにしを」は注に＜『集成』は「「たまふ」と敬語があるのは、地の文の気持が混入したもの」。『完訳』は「宮の心中叙述ながら、語り手の宮への尊敬「たまふ」が混入」と注す。＞とある。「かれは」からを内心文括弧に括ると、確かにそうした＜混入＞状態となるようで、それでは余りにも気持ち悪いので、私は下の「それだにいとめざましき」からを内心文括弧にして置きたい。

「それだにいと*めざましき心のなりにしさま(それでさえ随分当惑した夫の心が冷淡になっていた生活)、ましてかうあるまじきことに(ましてこのようなあるまじき大将殿の言い寄りは)、*よそに聞くあたりにだにあらず(無縁の他人でさえなく)、*大殿などの聞き思ひたまはむことよ(大将夫人が故人の妹に当たる縁故を、藤原の大殿などがどのようにお聞き思いなさることやら)。なべての世のそしりをばさらにもいはず(世間の悪口は言うまでも無く)、院にもいかに聞こし召し思ほされむ(父院に於かれても如何お聞き思いあそばされるだろう)」　*「めざましき心のなりにしさま」は＜宮が思った故衛門督の冷淡さ＞との訳文に従う。私には超難文だ。　*「よそに聞くあたりにだにあらず」は＜大将が全くの無縁故者ではない＞との訳文に従う。注には＜夕霧は柏木の異母妹雲居雁を北の方にしている、という縁者。＞ともある。　*「大殿」は「おほとの」と読みがあり、藤原殿を指すらしい。義理の親とは言え、藤君が死んでしまっては義理も援助も薄いだろうに。むしろ、藤君の弟たちは大将に遠慮して宮への援助を最小限にしているとの記事もあった。宮の思い込みの深さか、もしくは、大将と肌が合わないのを再確認して、藤原氏との縁を思い込むことで心理的に源君を排除しようとしたか。

など、離れぬここかしこの御心を思しめぐらすに(などと縁者の彼是のお気持をお考えなさると)、いと口惜しう(とても悔しく)、

「わが心一つに、かう強う思ふとも、人のもの言ひいかならむ(自分の気持の中だけでこのように強く大将殿を拒んでも世間が如何噂するものやら)。御息所の知りたまはざらむも(母君が私がこのように大将殿と直接会っている事をお知りでないのも)、罪得がましう(罪に思えるし)、かく聞きたまひて(この事情をお聞きになって)、心幼く(考えの浅いこと)」、と思しのたまはむもわびしければ(とお思いになって仰るのも辛いので)、

「明かさでだに出でたまへ(夜が明ける前にはお帰り下さい)」

と、*やらひきこえたまふより外の言なし(と、急き立て申しなさる他に言葉がありません)。
*「やらふ(遣らふ)」は＜追い遣る。追い立てる。＞と古語辞典にある。

「あさましや(寂しいですね)。*ことあり顔に分けはべらむ朝露の思はむところよ(今は情事の後に草原を踏み分けて帰るような朝露に濡れる時分なんですよ)。なほ(それを何も手出しさせずに)、さらば思し知れよ(其処まで仰るなら覚悟して下さいよ)。　*「事有り顔に」は＜情事の後の顔付きでの帰り道に＞。「分く」は＜草原を踏み分ける＞。「らむ」は＜～するような＞という比喩の助動詞。「朝露の思はむ」は＜朝露に濡れることになる＞。「おもふ」は「面ふ(その性質上に於いて結果する)」であり、「思ふところ」は現代語でも＜自明の理＞。また、「ところ」は＜時分＞。「よ」は訴求の感嘆詞。

をこがましきさまを見えたてまつりて(私が良識外れの見っともない所をお見せ申して)、賢うすかしやりつと思し離れむこそ(あなたが上手く遣り過ごしたと振り切るお考えなら)、その際は心もえ収めあふまじう(その場合はもう気持ちを抑えきれずに)、知らぬことと(前後の見境も無く)、けしからぬ心づかひもならひはじむべう思ひたまへらるれ(無謀な暴挙に出ることになりかねないとご承知下さい)」

とて(とまで言って大将は)、いとうしろめたく(実に心残りで)、なかなかなれど(手を出すか出すまいかと逡巡したが)、ゆくりかにあざれたることの(強引に遊んでしまうことを)、まことにならはぬ御心地なれば(本当になさっていない御経験不足から)、「いとほしう(無理強いは相手に気の毒だし)、*わが御みづからも心劣りやせむ(自分を客観的に見ても卑怯に思える)」など思いて(などと思って)、誰が御ためにも(誰にとってもこの日の事が後を引かないように)、あらはなるまじきほどの霧に立ち隠れて出でたまふ(なかったことに出来るほどの霧の深さに紛れてお帰りになります)、心地そらなり(虚しい気分です)。　*「わが御みづからも」の「御」は身分ある自分を客観視する、という意味だろうか。この言い方自体がよく分からないが、言っている内容もまるで分からない。子持ちの男でも遊び慣れていない者はいくらでもいる。が、それは、こういう場面に成ること自体、御簾内に滑り込んで宮の裾を引くこと自体、が出来ないのであって、召人遊びは恋ではないとしても、生身の女を相手にはするのだから、其処でもそれなりの経験は積むわけで、そのように色事に無縁でもない近衛芸能者が、この期に及んで、これ以上は気が引ける、などということは、そりゃ心理上の葛藤はいろいろあって当然だし、権勢家ならでは夢想する王家との秘儀への興奮とかもあるんだろうが、此処まで礼を尽くして、手順を踏んで、歌を贈答して、更に時間を掛けて、胸の内もはっきり打ち明けて、その揚句に抱かない、というんじゃ、いくらなんでも大将は憧憬を楽しみすぎる、宮の気持を宙ぶらりんに甚振り過ぎる、そういう性癖くらいにしか理解できない。だとすると、宮はつくづく男運が無い。そういう話なのか。そうとしか思えない。

「荻原や軒端の露にそぼちつつ、八重立つ霧を分けぞ行くべき　(和歌 39-05)

「こんな冷たい仕打ちにも、従う他は無いものか　(意訳 39-05)

*「八重立つ霧」は＜幾重にも立ち込める深い霧＝見え難い道＝理解出来ない道理＞だろうが、「八重立つ」という言い方が「をぎはら」や「のきば」の洒落語用になっていなければ、この当たり前の歌筋に歌詠みの意気は無い。宮家を＜九重(ここのへ、宮中)＞に見立てて、この日の出会いの＜宮の客人を招く(をく)腹(意味)←荻原＞を主題に頂いて、フラれた自分を大将は＜退場←のきば←軒端＞の際に泣きながら「分けぞ行くべき(承知しなければならないのか)」と臣下の無念を滲ませた、のだろうか。

濡衣はなほえ干させたまはじ(しかし、あなたはどうせ濡れ衣を免れなされますまい)。かうわりなうやらはせたまふ御心づからこそは(このように無理に追い立てなさるあなたのお考えの所為で、ことが穏便に運ばないであろうからです)」

と聞こえたまふ(とお聞かせ申しなさいます)。

げに、この御名のたけからず漏りぬべきを(宮にしても、確かにこの夜の出来事の御噂が芳しからず漏れ立つであろうことを)、「心の問はむにだに(せめて自分の良心に自問した時だけでも)、*口ぎよう答へむ(恥じない答えをしよう)」と思せば(とお思いになって)、いみじうもて離れたまふ(余計に余所余所しくなさいます)。　*「くちぎよう」は「口清し」の連用形「くちぎよく」のウ音便。「口清し」は＜口先だけ立派である。口先が巧みである。＞ともあるが、多くの辞書に当文を出典例として＜物言いが立派である。＞と説明されている。

「分け行かむ草葉の露をかことにて、なほ濡衣をかけむとや思ふ　(和歌 39-06)

「帰る時まで草露で、濡衣になると言うなんて　(意訳 39-06)

*めづらかなることかな(大将らしくない珍しい弱気ですね)」　*「めづらか」は＜［形動ナリ］普通と違っているさま。めったにないさま。めずらしいさま。＞と大辞泉にある。大将の歌詠みが、宮家に対する臣下の立場を愚痴ったように思えるので、宮はそのまま大将の職責に掛けて咎めた、と読んでみる。と、「めづらかなることかな」の＜めずらしいことがあるものだな＞という言い方は＜大将とも思えない女々しい言い方で似合わないな＞という叱責ないし揶揄の趣きを持って来る。

と(と宮が)、あはめたまへるさま(蔑みなさる態度は)、*いとをかしう恥づかしげなり(とても品があって気後れするほどです)。　*「いとをかしう恥づかしげなり」は大将目線での言い方なのだろう。となると、見下されたのが本望みたいなMっ気のようにも見えるが、実は実質で制御下にある女の王家身分に対して、臣下身分の役割を演じる自分を愉しむ、という歪んだ征服欲を満たす行為にも見えて、変形のＳっ気という大将の二重変態ぶりかも知れない。尤も、ＳＭを正服と被正服の対比認識だとすれば、それは人間社会という集団の組織構造に於いて、その上意下達の運営上で必須の行動規範の前提と成る基本認識の一環であって、その認識に何処まで人間性が縛られるかは人生を既定するかも知れないが、本質的には日常の役割認識だから、殊更に変態を言い立てるのは出版業界の宣伝に乗るようで慎みたいが、喧伝も販促戦略も投資と動員と扇動効果を実らせれば時の風潮を形成もするので、まるで無視するのも浮世離れする。

年ごろ(この数年)、人に違へる心ばせ人になりて(常人とは違う律儀な援助者として)、さまざまに情けを見えたてまつる(さまざまに気遣いのある御世話を申し上げて来たが)、名残なく(其れが今回は打って変わって)、うちたゆめ(羽目を外して)、好き好きしきやうなるが(色事になったのが)、いとほしう(宮にも失礼で)、心恥づかしげなれば(自分でも気が引けて来るので)、おろかならず思ひ返しつつ(大将は深く反省しつつも)、

「かうあながちに従ひきこえても(かといって形だけ礼を取り繕い直し申しても)、後をこがましくや(もはや色絡みの地金が知れているのだから、この先は通用しまい)」と、さまざまに思ひ

乱れつつ出でたまふ(と様々に思い乱れながらお帰りなさいます)。道の露けさも、いと所狭し(帰り道の朝露もぐっしょり濡れます)。